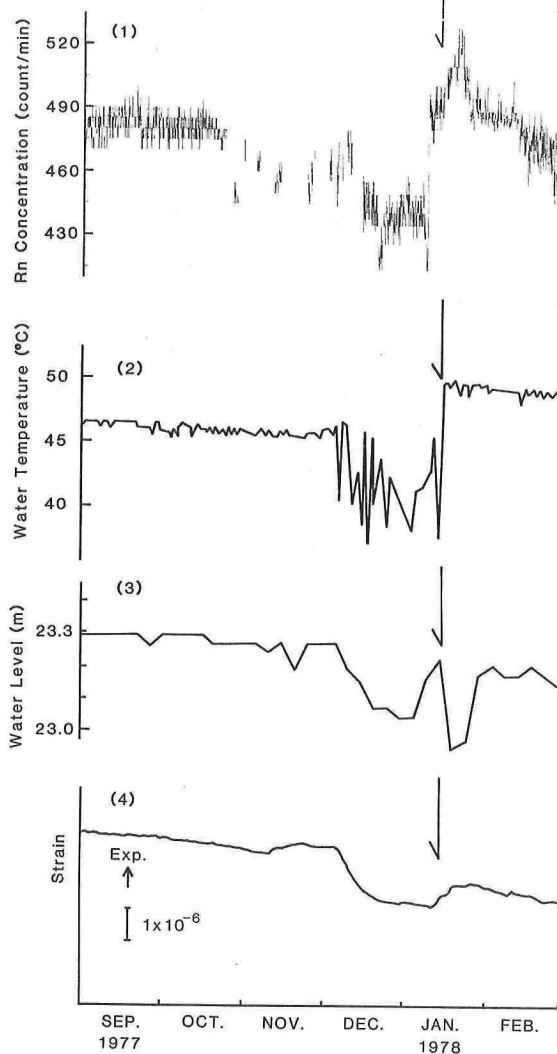


廣報

東京大学理学部

Izu-Oshima-kinkai earthquake
14 January 1978 (M7.0)



表紙の説明	協田 宏	1
新任の挨拶・理学部広報によせて	江上信雄	2
国際協力研究	永宮正治	3
〈学部消息〉		4

表 紙 の 説 明

地殻化学実験施設では、地震予知に関連する研究・観測を行っている。東海地方、伊豆半島、鎌倉、福島県東部に計10ヶ所の固定観測点を設け、テレメータシステムによる観測データの収録を行っている。

表紙の図は、伊豆大島近海地震（1978年1月14日、M 7.0）前に観測された各種の異常変化である。一番上の図は、本実験施設の中伊豆観測所で連続観測を行っている地下水中のラドン濃度の変化である。ラドン濃度は、10月中旬から大きく減少し始め、次第に激しく変動した。12月下旬からは、ラドン濃度は低いまま、ほぼ一定であったが、地震の6日前の1月8日に急低下した。翌9日に最低値を記録した後、以前の高い濃度に回復した。地震はその数日後に発生した。

このラドン濃度の異常変化は、別の場所で異なった種類の観測によって検知された異常と、発生時期、パターンが類似していることが注目される。

(2)、(3)は、震央から約30kmはなれたところにある深さ500mの2つの井戸の水位および水温の変化である（地質調査所の観測による）。(4)は、震源から約50kmの石廊崎における埋込式体積歪計（気象庁）の変化である。

このようにはっきりとした異常が、どの地震に対しても現われるものではない、あるいは、観測できないところに地震予知のむつかしさがある。

地殻化学実験施設

脇 田 宏